



詩歌連狂
 季寄註解
 改正月令
 博物
 筌夏之部

四月部目錄

△印ハ非諧の
季と拵り

養生の法。風雨のしん久。米の豊
 凶。妙茶其外人家重法のてい
 る。あるゆへ目録よハハハハ

四月

桂陽生 調子 陽生 興名

立夏節

△小満中

日令

此部ハ四月日の定り
 して其の定りたるを記す

更衣

△夏衣 △夕花衣
 △なまき衣 △あひあ白重

青簾

△女衣服

風炉の茶

△貴船神事

筑摩祭

△山崎目使

稻荷祭

△大神祭

八瀬祭

△久世祭 △山科祭

多賀祭

△平野祭

卯上

日朔

辰上

卯上

辰上

巳上

午上

未上

申上

酉上

戌上

亥上

子

丑

寅

卯

辰

巳

午

未

申

酉

戌

亥

子

丑

寅

卯

辰

巳

午

未

申



四月 目録

△當六祭 四丁	△當六祭 六丁	△當宗祭 六丁	△大津祭 四丁	△擬階養 七丁	△灌佛 七丁	△山崎天王祭 七丁	△戒壇堂開帳 七丁	△地主祭 八丁	△移り供養 八丁	△土塔会 八丁	△吉田祭 九丁	△近江幡祭 九丁	△菅宮祭 九丁
△炎本祭 四丁	△梅宮祭 六丁	△水屋能 六丁	△廣瀬祭 七丁	△竜田祭 七丁	△龜山花摘 七丁	△大峯上山 七丁	△神衣祭 八丁	△夏入 八丁	△千箇祭 八丁	△向日明神祭 九丁	△御蔭祭 九丁	△園自賀茂詣 九丁	

西中

岩神祭 四丁	△賀茂祭 四丁	△御形日 九丁	△管笠檐 九丁	△中山祭 十丁	△坂本山毛祭 九丁	△葵祭 九丁	△葵桂 九丁	△さが祭 十丁	△賀茂の目祭 九丁
--------	---------	---------	---------	---------	-----------	--------	--------	---------	-----------

東照宮御祭 △和奇祭

△高野花供 十丁	△夏駒牽 十丁
----------	---------

月令

此部は四月一ヶ月日の定まらざる祭りあり

△神祭 十丁	△斎刺 十丁
--------	--------

△榊取 十丁	△三枝祭 十丁
--------	---------

△茶誥 十丁	△煮酒 十丁
--------	--------

△矢数 十丁	△松前渡 十丁
--------	---------

時令

此部は四月の時候より

△首夏 四 三十一 △清和天 △梅天 四 三十一

△外花朽 四 三十一 △新暖 四 三十一

△短夜 四 三十一 ○長日 四 三十一

○時衣 四 三十一 △卯の花衣 四 三十一

草木 此部は四月一ヶ月のくさ木のさかえとあつたてし

△餘花 △まげの花 四 三十一 △桐の花 四 三十一

△檀の花 四 三十一 △枳花 四 三十一

△実栞花 四 三十一 △栞子花 四 三十一

△乳栞花 四 三十一 △橙花 四 三十一

△抽花 四 三十一 △金栞花 四 三十一

△雲栞花 四 三十一 △佛手栞花 四 三十一

△橘 △蘆橘 △もも花 四 三十一 △厚朴花 四 三十一

△秦椒花 四 三十一 △梭桐花 四 三十一

△柳花 四 三十一 △榎花 四 三十一

○槐花 四 三十一 △外花 △まげ木 △まげ茶 四 三十一

△菽椿 四 三十一 △牡丹 △牡丹州 △漆足州 四 三十一

△紅牡丹 △名取中 △買貴中 四 三十一 △白牡丹 四 三十一

△杜若 △まげ花 △まげ玉 四 三十一 △芍薬 △まげ中 四 三十一

△一八花 四 三十一 △王孫花 四 三十一

△覆盆子 △州いらご △蛇いらご △つらいらご △木いらご △まげいらご 四 三十一

△芥子花 四 三十一 ○阿片 四 三十一

△躍草 四 三十一 △白丁香 四 三十一

○風落州 四 三十一 梅蕙州 四 三十一

○玉不留行 四 三十一 △羊蹄花 四 三十一

○車前花 四 三十一 △文字草 四 三十一

△吳光中花 四 三十一 △山菅花 四 三十一

△風車花 四 三十一 △繡毬花 四 三十一

△岩梨	△石藤	△寶鐸花	△鴨足山花	△夏枯艸	△茨花	△千日紅	△青木花	△要花	△盧陀草	△新樹	△若葉	△木草茂	△木下蘭	△葉椽	△若楓	△栢若葉	△常盤木落葉	△新茶	△刀豆花	△葵中	△紫蘭花	△茶挽中	△玉卷葛	△玉卷芭蕉	△蓮浮葉	△根都古巾	△豬殃々	
四丁	四丁	四丁	四丁	四丁	四丁	四丁	四丁	四丁	四丁	四丁	四丁	四丁	四丁	四丁	四丁	四丁	四丁	四丁	四丁	四丁	四丁	四丁	四丁	四丁	四丁	四丁	四丁	四丁

△梅葉	△麥秋	△麥秋風	△青麥	△麥刈	△麥葉留	△蓮のたゝ	△竹の子	△篠筍	△椽実	△綿蒔	△美人州
四丁	四丁	四丁	四丁	四丁	四丁	四丁	四丁	四丁	四丁	四丁	四丁

生類

此部より四月一ヶ月の
いさめのとあひひ

△郭公
△子規△不如帰△あまの田長
△初農鳥△とさそ△時鳥

△待郭公
△初聞郭公

△郭公一声
△夜郭公

△雨中郭公
△名所郭公

△諫鼓鳥
△和歌
△段原雀

△老鶯
△乱鶯
△鶯付子

△鷹嶋入
△飛蟻

△蝙蝠 フウフウ 世平 △蚯蚓出 クワダ 世平

△蜘蛛の子 クモコ 世平 △蚕眉 カマヤ 世平

△枝蛙 エダカ 世平 △鹿袋角 カシノカ 世平

△罍の子 カシノコ 世平 △初鯉 ハツカ 世平

△生節 ナマフ 世平 △鯉了 カシノ 世平

必用 此部より雨風の占の破軍

の向方○日よりけうは○他行の心

得○作事の吉凶○料理執事合

物のよりは等其外まゝくわ

心日の定まりくる事ハ口の日令の

部より此部より日のまゝ

より四月一ヶ月の事とあつて

月令博物筌夏之部發端

丸き内小書より夏の
 氣の旺する所あり
 礼記月令より其
 帝炎帝其神
 祝融其日立
 夏盛徳火の
 在とい陰氣
 在とい極りて陽
 氣うんく炎
 熱の時節あり
 ころると注釈下詳あり

夏泉 漢書律歷志曰夏則火
王其精天在温暖乃

氣百木を養ひ生どころり又夏
に假り物假く本はて宜平とく

○和語より訓よりあつて
音の下略よりあつて音通よりあつて

○方南より後漢書天文志曰日南
陸を行を夏よりと見えり

○夏は日月東南の赤道を行くを
南陸といふ易統通圖より

○精を朱雀と南方火を主とす
よん其禽は朱雀といふ

○人の禮との周礼の注疏は曰踐て身
行ふと履といふ履は礼といふ人の事
を得るなり礼法身備て見事なり

てのなりとていふ○天を昊天といふ爾雅
は曰夏を昊天と孔安國の云元

氣廣大るといふ陽気さうん
して草木生るといふ体さうん○卦

離といふ人を取て和順さうん
離と附と訓を別まてさうん卦

より又は心を生て親と寄る心
とて○氣は陽といふ管子は曰其時

を夏と云其氣を陽とて四の上
に詳さうん○臟は心といふ身の心乃

臟を陽を主とて火に屬し
夏は配當と故は火藏といふ○色

は赤といふ説文は曰南方の色さうん易
疏は火赤は其盛るといふ陽乃

色さうんといふ○味は苦といふ書洪

範は炎上苦を作るといふ苦味
火は屬とていふ

夏異名
○朱明 ○朱夏 ○炎夏
○炎節 ○光明 ○長夏

○昊天 ○南陸 ○炎帝 ○祝融
○仲呂 ○丙丁 ○執衡 ○南訛

○暑節 ○正陽 ○假宣 ○長養
○氣陽 ○炎霽 ○奇峯 ○南爲

和
○かきふ 雲御抄かきふひく 同上
○まわじ 袖中抄まわじもまわじの註は夏の

夏異名註
○朱明といふ陽色さうん
くといふ明らさうんといふ

○朱夏 ○炎夏 ○炎節 ○光明
つとも朱明といふは同ト ○長夏

といふ物をやさい長とてさうん
仲呂といふ陽散とて外はなり陰

實して中みあり旅陽功とてさうん
ゆふ仲呂といふ ○丙丁といふ禮記の

其日ハ丙丁ハ炳なり萬物皆炳
然とて著見え強大さうん ○執

衡とい南方の神炎帝離ふ來
衡を執り夏と司るなり。南
訖とい北に化るり南方陽氣に
いふいふ万物生く

○正陽とい陽氣たじさ時節と
いふ事あり。假宜とい假大とい

いふ事あり。長大ふのびあく。○長
養とい万物生長とる月とる云

○正陽とい陽氣此月は充滿とる
なり。炎霽とい陽氣なりた

くすめりなり。○奇峯とい夏の山
に雲の出るてなり又夏の雲のけ

し山の形は似るゆへに。○南為
とい南方の陽氣を以て物のちると

いふ事。○炎帝。祝融。昊天
いふも註に夏の由来の所なり

はやちん 夏の朝に 和蔵抄に
つちまのそこのし雲

といはけてあての田をの秘するなり
○右の外三夏ふりる物の別部有

四月之部

△此印あり能
借の季と持のえ

此月純陽の月

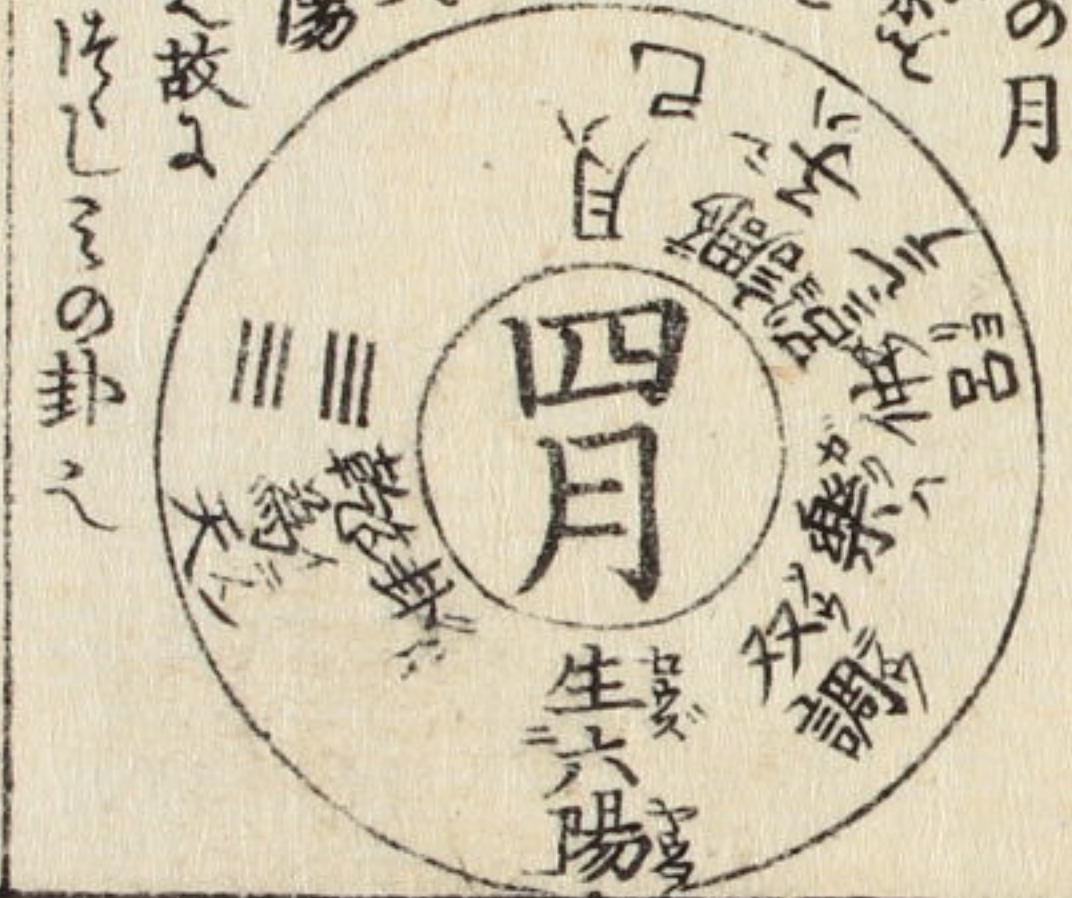
保養して

發泄とる

卦の乾为天

といふ乾の陽

のつよれ卦之故よ



異名

△首夏△孟夏△初夏△新夏
△早夏△立夏△之月△余月

槐夏。清和

純陽。正陽之月

△得鳥羽の月△花残月△夏初月

○こけとる月△うのたふ月

異名註

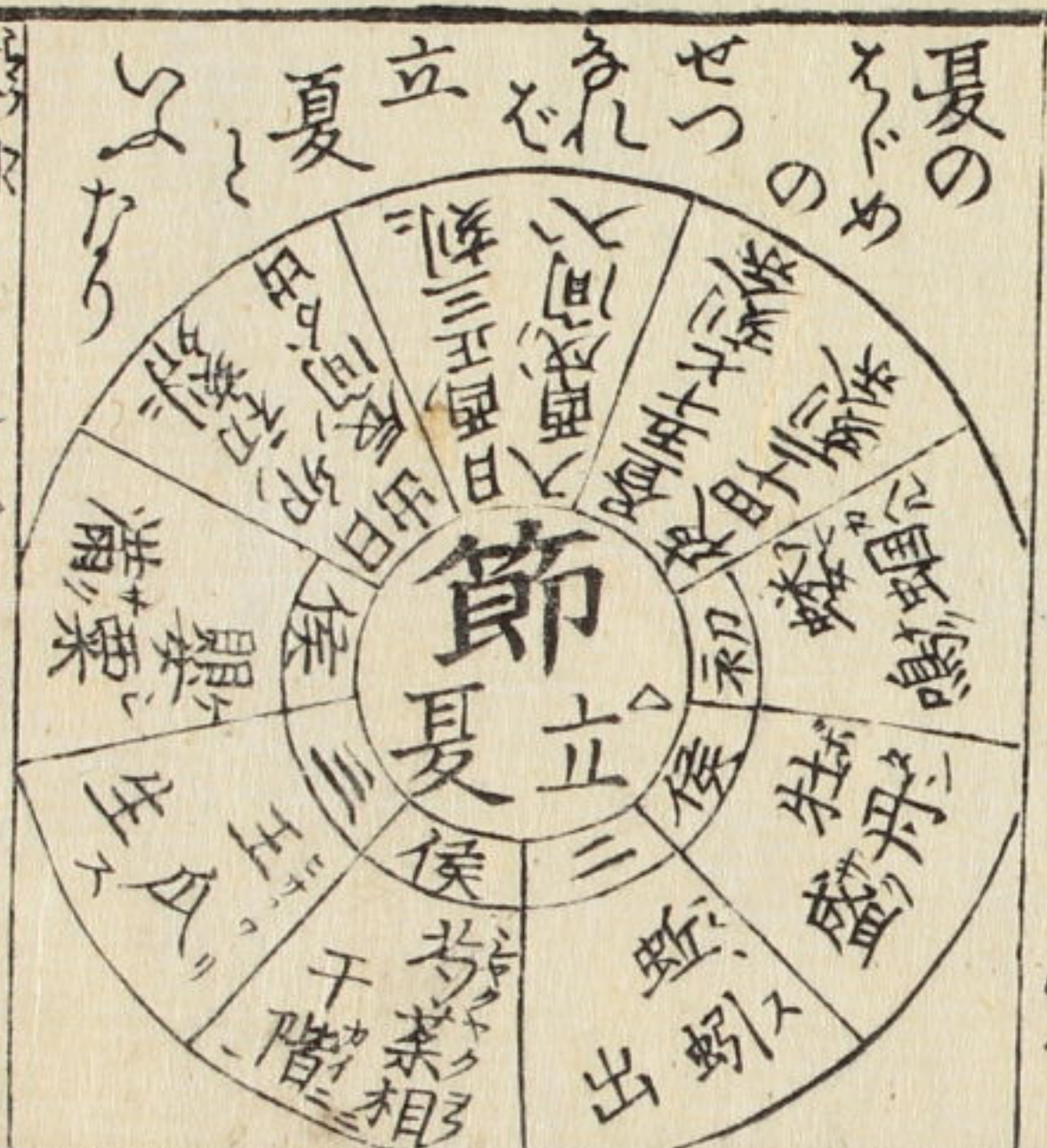
△首夏△孟夏△初夏
△早夏△立夏△之月△余月

○新夏といふは夏と云と。○早
夏といふは夏といふ。○立夏の四月の

節の名とつう。○五月の月あまのま
 ころ意え。○余月の陽あまの月と
 いふ。○櫻夏のあんど花さく故
 まづく。○清和の陽とまやうぐえ
 △麥秋のしき月ゆへ。○六陽と至
 と一陽とて四月と六陽とす。○純
 陽の純の專の陽さかんと云。○正
 陽の月の正の陽の至極あつ月と
 意え。○仲呂仲ハ中ハ呂ハ助ハ
 陽散と外ハあり陰中ハ在て成陽の
 助ハ助ハ。○外月の花月と置さう
 花藏玉 まさういの月
 夏の花あまのまろれくこの
 下もまもてんまうりの月
 莫傳 うれ花月
 夏屋のつらにぢれまみふ
 うの夏月と何とていふ
 今 夏初月
 付るまもまもまてあつ月
 花初のふれかまのいふ

節

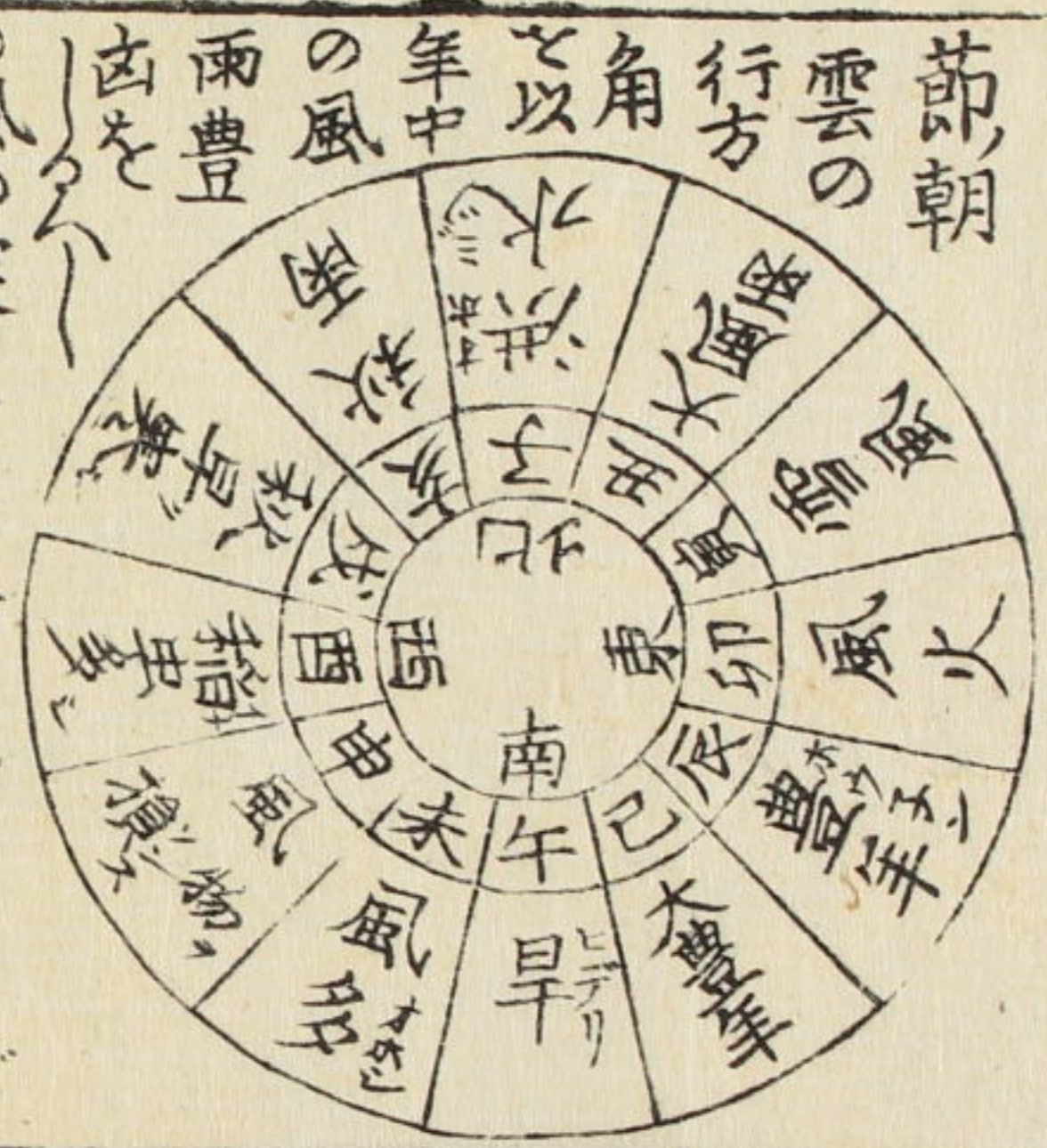
○七十二候。艸木七十二候の月出
 入。昼夜長短委く左ふあす



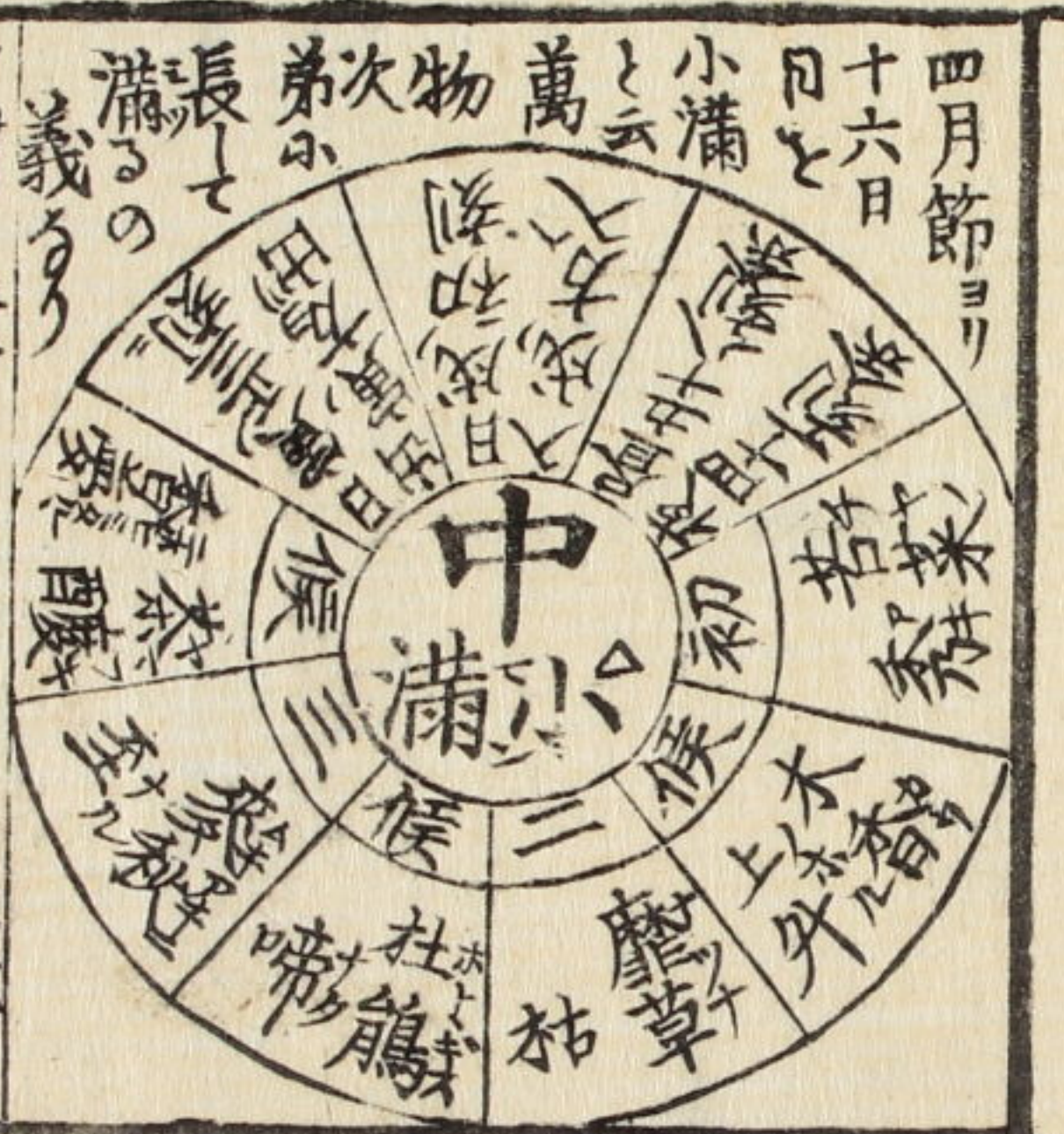
夏の
 夏
 立
 夏
 蟄蟲の蛙と此月地は六陽生
 て陽氣上より升りて陰氣下より
 降る。蛙の陰氣を食む。○蛇
 蟄の秋より夜は夜は陰虫
 陽を迎へて地上より出る。燕乃
 来る。○王瓜の蔓より

○牡丹。芍薬。罌粟。此分る
 花さく頃なれ。此月の候とす
 節
 天気占候
 今日
 日輪

暈あまの洪水あり晴まの旱り
 ○雨降まの五穀ふよる○今夜
 月をれ參星東のまの山田半
 収南のまの旱北のまの大風
 人病む○雲の大さ車或ひの笠
 ほどく見ゆるものあふ時ハま
 陽水の氣あり暑小至て水の湯
 まる○東風あふ疫病の難は



中 ○七十二候。艸木七十二候。昼夜
 長短。日出入等候左記を
 ○風の定まらざる時ハまるとせむ
 定りて一方へ吹てまるとせむ



四月節 十六日
 小満 萬物 弟 張 義
 苦菜の茶の事之以頃茶と
 つと取之○靡草なるもの類冬
 水より生じ草の物名之夏の
 火氣よあつてわくぞ○秋の稲
 豆その外物の收る時まれば麥の
 此月かり納るを秋といふぞ

○木香上外。杜鵑啼。茶醜
 香夢此皆小満の頃さた或ハ啼く
天氣 小満の日と麥生日といふ
 天をまの麥大い小熟と

日令 四月日の定りたる事支
 の定りたる事とあるす

朔 天氣 今日朝日の出る所 東に雲多く西晴

たるハ月中天氣は日小暈あり 大風吹

きバ今月中雨多し 〇西北の風吹

けバ米價貴し 〇九大風雨す

ハ飢饉とらる 〇秋大水あり小雨風す

はバ秋大水あり小雨風す 秋の水とくふし晴きハ早リ

〇今日雨す 〇豊年二日小雨

ふまバ水多し三日の雨ハ早リ

更衣 △裕 △綿拔 △郊の花衣

△白襲又白重 △橘衣 △赤衣

〇更衣の時の服襲裏表共み

白綾或ハ平絹白くかき之禁中

の御装束 今日より改る 〇御帳の

かびらとじふき 胡粉みて

繪とかきとらる 〇着服を

かゆる故更衣とす 今日より綿

入とつてありせぬとらるべし

女衣服

衣裳の色ハ定は

下帯ハいりハ前をむとび

たるはえ 〇昔ハ民家にて今日より

足袋とらるざりしとあり禁中

院方の女薦ハ四季よりふめ守

新古今 前大僧正慈圓

ちりとそ花の簪は本丸に

夫木 俊成

まくれを衣へしてふらふり

同 田舎更衣 仲正

あつたれをまぶのあさねとらる

ぬさうある 〇夕のまき 〇一夜の

衣のいじん 〇山がけ 〇ありはし

衣 〇飛丸 〇衣 〇衣 〇衣

① 連山のちのそむきさうや夏衣宗祇
② 非いそ新衣布着るう博衣芭蕉

大酒をそびて物うさ裕る其角
初後とくに扇ぬぐ方工部移竹

催もくま中つせの表初部立圃
そびのちかろさふうつま衣十摩

衣指小まかまほりこるもく西鶴
一日て花ふえき給う郡思貫

衣久新巾一つ出来はかり之道
狂ぬまそくふえとくもろくや

花んろわの袖ぬりそて入安
夏衣のくくしと縁とぬろく

魚の腹のや卯おさるん貞徳
吉日簾あたまざん 香葉簾とも云今日より
殿は新衣御簾みさ

③ 續拾遺 土御門院
ひまをんていそ知つんぬとこれ

くふとろかりるさろかりとを
④ 非み後修ろそはまき後嵐雪

袖かして内を床とまき後虚白

主水司始供水しんづき 四月朔日
九月廿三

天子へ氷と奉るなり延喜式に出す

孟夏旬まげのしゆん 夏季の改ら始小臣
下の政を聞しめて

御酒とたび扇と頒ら給ふゆへ
△扇拜とも云今い絶あきら 出い 公事振元

⑤ 年中行事哥合 殿中將
法人のけりある神ふかひあり

ゆふ扇の風もものけり
風爐の茶ふうろのち 三月廿日炉とさる
朔日より風炉おる

京きやう 貴船 近江きんけい △筑摩祭△鍋祭
神事 とも云此里の女

嫁入を鍋とがづいて神事ふ出再い
とも入といひ二枚ふは幾度ととも男

りらる教程鍋とろさ参まゐ 或ハ初
午の目

⑥ 非格もて福かきるあふふ出賣
二京 調子村祭 山崎の近所
日 圓明寺小倉大明神祭能

三 天氣 今日天氣晴まら夏
中風雨順めで五

穀豊年也たまにうて
米と商し輩四が三と唱ふ

禁忌 此日一切の血を
見るとかひいひ 京 山崎目使
山崎離

宮の社人行別を八幡参り
俗に長者 形にいへ

○宇治黄檗開山隱元禪師忌
近江 山王榊御出夜半頃大津四
の宮へ御出是山王のおまじ

祭の日神幸のさた大津より
大宮の拜殿ふかへ入を奉る

上 京 △稲荷祭此月外三ツの
中の外れ日へ 弘法大師

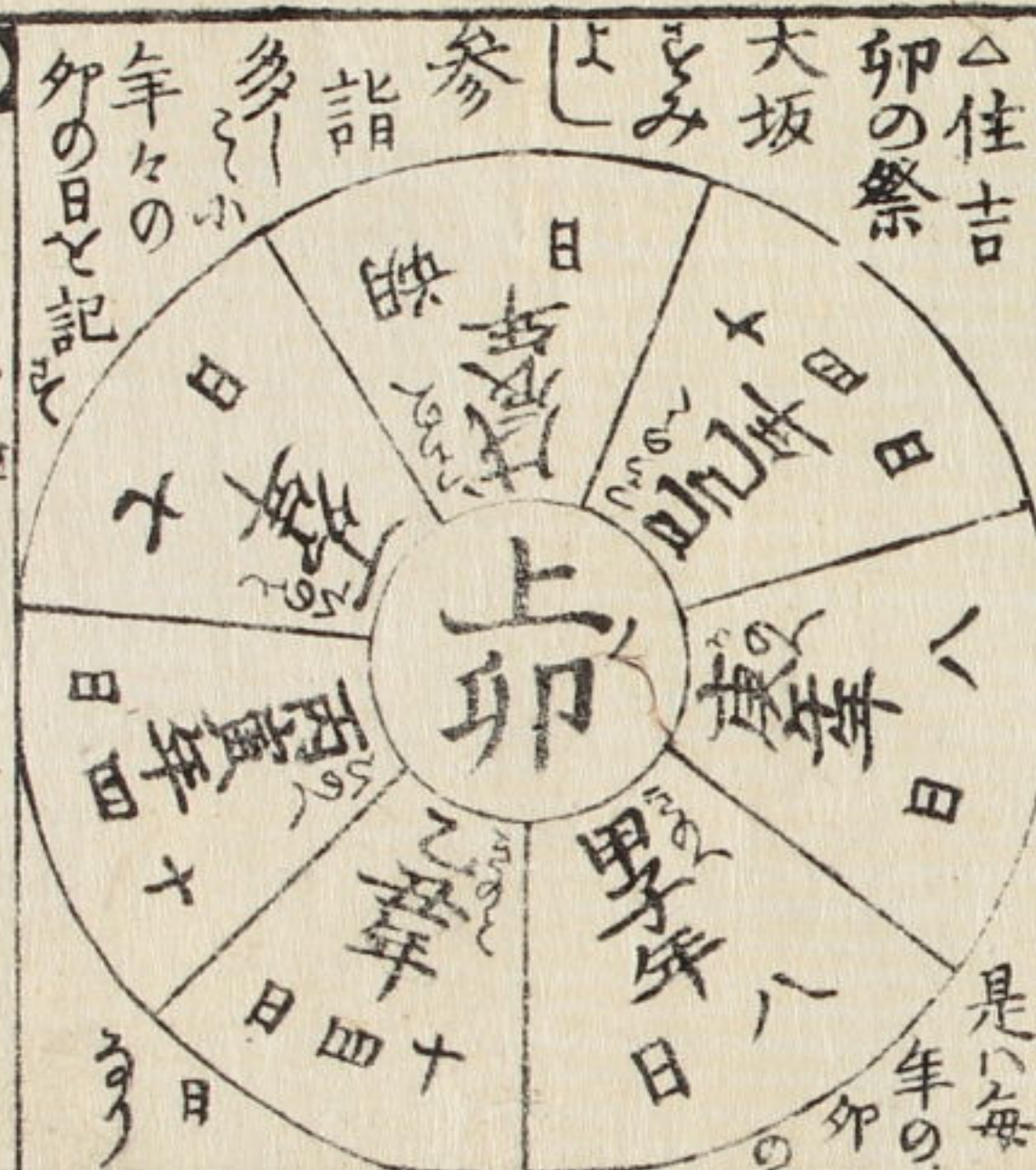
東寺造営の時稲と荷ひる
翁不現しふ神と初午の所逢

合まうたうだ 是稲荷山鎮座
の時大師其面容を自らさごみ

給ひて神事の最初祭とあう
神興ふりける面としくり

大和 △大神祭 大神とい三輪の神あり
大物主の神の所とへ
◎年中行事 宗信法眼

我君の御代まさくんりりふも
おほまの神のまうりせけ



上 京 △八瀬祭 辰三ツあひい
中の辰日行りあり

上 京 △山科祭 北山茂登岐明神
祭 △久世祭 三ツ己あひい中

近江 △多賀祭 △堅田祭
○三井寺 早尾祭

上 京 ○北山イカダチ
明神祭

上申 京 平野祭 貞觀年中
年中行事奇合 二位中將

柗 柗の月来りて山人の
手神の表ふゆふとせり

大和 河内 近江 祭
祭 祭 祭

上酉 京 松尾祭 貞觀年中
年中行事奇合 貞世

梅宮祭 橘氏の祖神あり
年中行事奇合 秀長

梅のまゐふふつる由緒あり
梅のまゐふふつる由緒あり

河内 近江 祭
祭 祭

四不成 天氣 今日雨降
南都 五穀貴し

水屋能 四日五 大坂 天王寺講堂
地人能 日あり 結夏 音樂

大和 廣瀬祭 竜田祭 右兩社同日
祭あり 大忌風神の祭と云

天武四年小風神とタツタツノ祭あり大忌
神とト野山まると日本紀に出たり
風水の難とのぞく豊年といふ神入

五 京 六 江 目黒祐天寺千
部修行十五日と

七 擬 奏 是の二月は列見とて六
位以下の藝能ある者

を撰て式部兵部の二省より
ひきとりてまゐる以上卿升達を

札に記し置き今日持てまゐる
を大臣より取て奏聞せしむと

大坂 佐吉八 今日法事おま茶
會日 とりひき出る

天氣 未の刻大風とまき昼雨ふれ
豊年の夜の雨の宜いはず

禁忌 遠行旅立ちとる悪
○草木と切打といひ

灌佛 佛生會 浴佛 佛の湯
龍花會 唐の寺にて五香水と

龍花會 以て佛よめす

△花山堂△五香水△つじ仏奉ル

○五才六歩の釈迦の像と造り金乃

鉢の内へ金を衆僧法と修す是世尊

生まゆふ時天竜産湯と奉一象こ

○年中行司 咲池 卯月のなみどか人

まいるる久き法のとあさ

○非 麦飯と母たきて併せと云其角

せんの虫のやぶ法 左の哥とちんくの柱

○とてこれ八月八日の吉日よ

かきさけむのせいといとま

京 山崎天王祭○大原 大坂 住

證據わむと堂参詣

大嘗會○天王寺講堂佛生會 午刻 音祭

○同所太子堂結夏開關 午下

山城 比叡山花摘 ○戒壇堂

開帳 ○水無瀬祭○かいで

光立寺 南都 興福寺佛生會

開帳 伶人舞祭の奇祭と云 俗には長くいふ

大峯山 今日より始て上戸用

しり九月八日まで

役行者この山の岩窟に金剛胎藏の法と修と千百年かゝる

九日 清水寺 不成 晴天の

日 地主祭 就日 天気 世豊

四日 天気 晴天の豊年なり 謠云

今日黄昏時分と見よ

日月對してせし秋旱なり

東南風の豊年なり

伊勢 △神衣祭 麻績連麻績にて

神明を奉るをいふ

大和 △練供養中將姫の忌當麻寺

ふて行ふ真言浄土兼学の寺

十五日 夏入 佛家ふて一夏九旬と云

て今日より七月十五日迄

禁足とて夏あかりるといふ夏

へ地は草繁茂し虫多く出来

るを踏殺さふといふ是を安居

と云ふなり夏十九丁出たり

京 五山兼拂一山の衆徒と集め

禪師拂子と取て高座に登り

偈を久諸禪師久諸禪師問尋問尋せりせりく
東山新東山新熊野熊野大般若轉讀大般若轉讀修行修行人

江戸 小松川小松川教導寺教導寺中將姫中將姫の筆
阿彌陀阿彌陀の像像用帳

大坂 天王寺天王寺塔會塔會子の刻子の刻行ふ
昔昔の天王寺天王寺七村七村より鐘鐘と出

祭祭りゆり其時其時の祈祈りりの馬具
面人形面人形を村々村々社内社内におも有おも有とく

天氣 雨雨ふれれい豊年豊年の暮時暮時日
月月と見見ふ相対相対して照照ら

せせ秋秋早早かりかり。月月ののゆるゆること早
くくして雲雲は紅紅色色ふふれれい大大い

ででりりまりまり又又月月ののゆるゆることことれ
そそくくして白白ささい雨雨ととつつききどどる

六十 京 安珍寺安珍寺鬼子母鬼子母神祭神祭 三井
とと同同くく今日今日修行修行も

江戸 杉杉夷夷稻稻 近江 三井寺三井寺
荷祭荷祭礼礼 近江 千團子千團子祭祭

願願ある者ある者たたんんごごと千千くくううへへ鬼鬼子子母母
神神へへままりりとと参参詣詣ししててふふりりいいふふ
くくるるままりり千千くくううへへとといいふ

中子 京 △吉田 中辰 京 △向日明 神祭

中夕 △近江八幡祭 蒲生郡八幡村在
後世後世ニ至至リ 移移日日杉山祭杉山祭神石清水同

中午 京 下賀茂 大坂 玉造稻
御蔭祭御蔭祭 荷御出

近江 △菅宮祭 中申 關白賀

茂詣 御車御車之之地下地下殿殿上上入入前前驅驅之
ああまま遊遊びび駿河舞駿河舞ををど

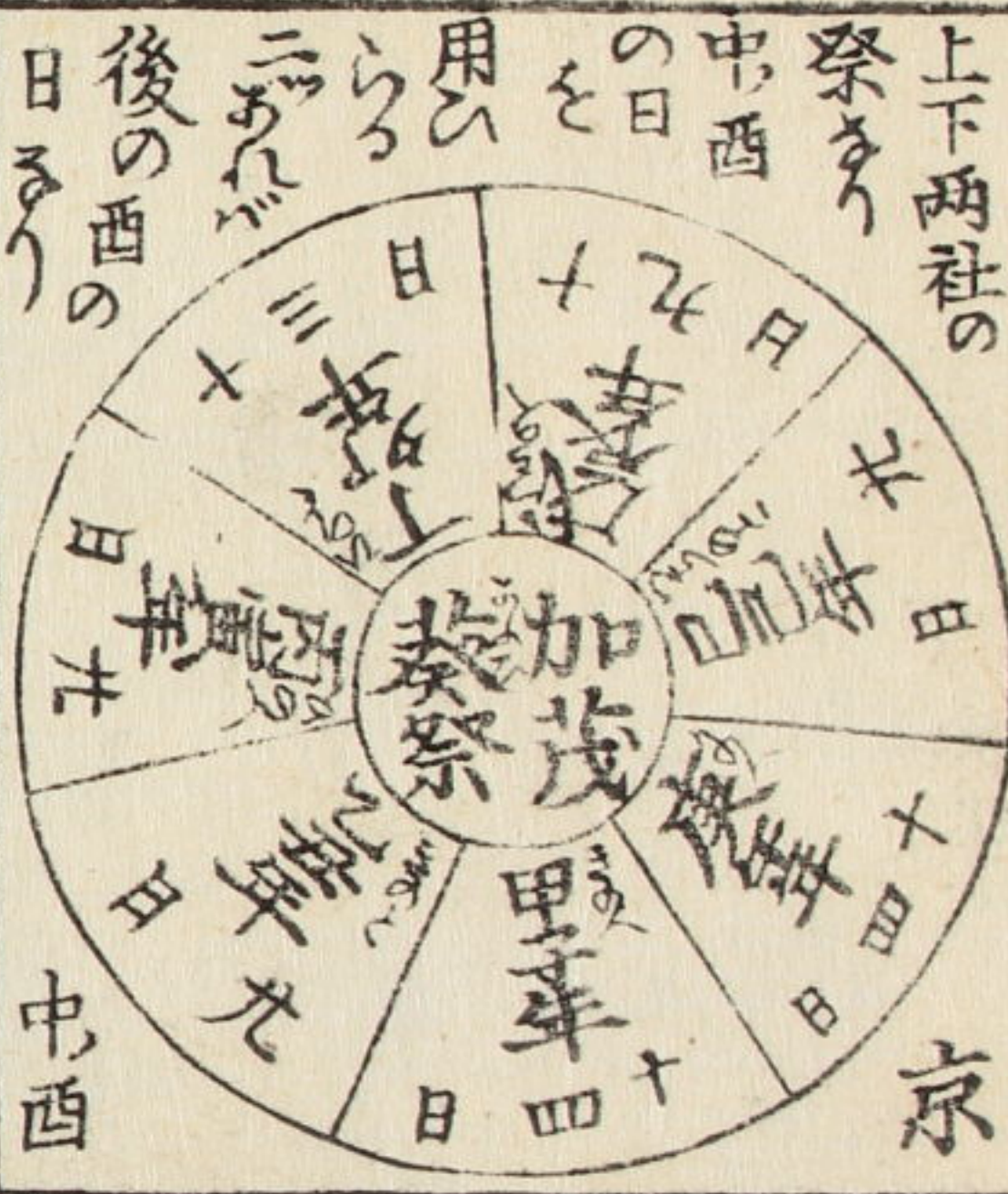
の神事の神事ありありと公事公事根元根元お出お出り

中加茂△國祭。如茂社ハ山城國の地
申故會此祭ハ國の者ヲ祭ルニ合ハ絶た

近江 坂本山王祭 非さで活やむ
ううままの祭祭ハ内裏内裏より祭祭ららせせ玉玉之

中酉 加茂祭 上加茂上加茂みみいいろろ乃
御神御神。下加茂下加茂の神神躰

御祖御祖の神神より△祭祭りりととええり
いいへへ此祭此祭りりままりりふふあありり



葵祭 今日人々葵のついでに
ゆふは世俗葵祭といふ

御形日 御生とも吞今日加茂の
神生とも吞今日あはれ

葵桂 諸鬘とも云葵と桂と
とさす故諸鬘といふ葵

静原より取来り桂は松の尾よ
り伐り来り諸のかざりとん

菅笠擔 大なるさげ笠とさし
荷ひまゝる行列あり

夫木 夫木 夫木よりたつは祭あり
とせりゆりか茂の川を 後京極

年中行事哥合 頃阿

神山のあひを盡てたがねり
のころさうとさげとけん

夫木 西行

とく事形形のあふりたの
あまりといよれりしとそと

詞 神も嬉し。何色もる葵ま。
みあまの山 洛小たの川のやうひえ

と丹やうの矢とみくしてせしむら
不の名をりて神は名付なり

ふよある。葵うらる。葵車。勝
車。物見。蓋 見神るにさ

連 ちあてり母は葵の二条小宗牧
八我豆を中り木あり祭り去路

任 かあましくもかたけ神の祭り
みせも葵とてなるかうて常盤菴

中 京 土焼 祭 日 亥 中 京 是則愛

宕権現の祭祀あり祭る神
二座伊弉並尊一座 火産

靈尊一座と云むいへ平安
城鷹峯東又社ありと光
仁天皇御宇天應元年秋の
慶俊今の霊地より一奉
ふりし神輿へ山下清涼寺
より出つ土人の女屋臺ふて
舞ひ或は傘鉾を出し風流に
△中山祭 神輿の 冷泉院に
ねりる石神これより天喜
元年四月よりさうだ先その
官幣と奉らるると云
是中酉日ありべし
七十 大和 東大
日七 戒使

東照宮御祭

日光山
その外

諸国あり○紀州若山御祭殊ふ
美麗△和歌祭と云△雜賀祭はふ
北 天氣 東南の風を真風
と云ふ大豊年とす
○南風ハ早 西北風ハ洪水
東北風ハ水西南風ハ平さり

京

泉涌寺雲林院
如法経會 廿九日

一 高野花供 紀州高野山を
弘法大師の像の御
衣を之を是と花供といふ今高野
金堂より學侶の僧薬師會と
修行し花を供むるの日と大師の
御衣をかめる日と同日なる也と云

北 伯耆

大山 廿
天休節
祭 八日 不成就日

晦 夏駒牽

○小の月をいへ
廿八日小行とる

天皇武徳殿より出御あり庭上
ふ御馬とひさ渡と白馬の節
會のあり此は来月騎射の
馬射人をいへる御覽せし
向より負觀の頃よりは
ト先らる猶延喜式ふくはし

○北野御神事 音栢御供
○新日吉祭 昔ハ今日近世ハ五月

月令

此部ハ日ノ定キル四
月一ヶ月ノ事ヲモテ

神祭

此月神事多ク名
を以テバ季ニシテ

齊刺

神祭セシトモ松竹柳
ニテ事アリ

金葉

此ハ春月ノ事ニシテ
其ノ事アリ

神取

△神ニテ是モ祭乃
江次ナキ

△神ニテ是モ祭乃
江次ナキ

三枝祭

辛川祭ニテ
三枝ノ花ト酒樽ナリ

△故ニテ神祇令ハ夏ノ祭ノ
所ニ載ラリ

△神ニテ是モ祭乃
江次ナキ

茶誥

宇治ニテ今月挽茶壺
ハ洗ハルル上品ト鷹ノ

凡クハ銘ハ極上ト凡クハ拾叟袋

トテ壺ハ洗ハルル極上ト中々

トテ壺ハ洗ハルル極上ト中々

トテ壺ハ洗ハルル極上ト中々

トテ壺ハ洗ハルル極上ト中々

トテ壺ハ洗ハルル極上ト中々

トテ壺ハ洗ハルル極上ト中々

トテ壺ハ洗ハルル極上ト中々

トテ壺ハ洗ハルル極上ト中々

トテ壺ハ洗ハルル極上ト中々

トテ壺ハ洗ハルル極上ト中々

トテ壺ハ洗ハルル極上ト中々

トテ壺ハ洗ハルル極上ト中々

トテ壺ハ洗ハルル極上ト中々

トテ壺ハ洗ハルル極上ト中々

トテ壺ハ洗ハルル極上ト中々

トテ壺ハ洗ハルル極上ト中々

トテ壺ハ洗ハルル極上ト中々

トテ壺ハ洗ハルル極上ト中々

トテ壺ハ洗ハルル極上ト中々

トテ壺ハ洗ハルル極上ト中々

煮酒

京師是と酒煮といふ
て酒肆あついと

おろひいすれ飲む是を
酒煮の祝いとつゝる

矢數

△大矢數も云 洛東
三十三間堂を此事

とみん弓の天下ととる小矢
を通ととむりより四月

中旬小極まけり日のあつた
とつてのゆんやうべし

松前渡

商人蝦夷松前渡
冬春ハ寒氣強

渡りかへ故此頃渡り秋上る
非表はて船の田多阿嶽等水

時令

此部より四月の時
候よかる事とあつむ

首夏

四月の異名をいふ
その只夏の初と云意

新古今

素性法師

をくはともあふ春もあつり

いとぬきさる夏もあつり

建保百首

定家

大井川のりぬきをのま
なるさかたりと衣わたり

新續古

首夏風

左大臣

吹風もやいとらん花の香の
うとれたりし秋もあつり

詞ちるた友のを氷はあつり
冬よりお茶はつるこむろ乃襟

きのめは去りし秋もあつり
春はあつるは卯月の始め林と

春の休まは月日は夏の来ふ
非年とむるは卯月のあつる思貫

ひくくとお茶のひるあつり
狂言二月つのもあつる呉竹の

煎敷とさふまはつるあつり
六谷

首夏五字對句

清和味換衣 風光夏葉初

セイワイニダカヘコロモヲカ
ノドカニニテアツカニ

ハホクラニカセアリ

幽僻還聞鳥イウキマキニキキトリヲ花落春鶯晚ハナハオクハルニユウウノク

詩 首夏七字對句 詩礎

西灣水綠堪銷日セイワンニミヅニドリタタリタタシク列樹雲レツジュクモ

南浦花紅好送春ナンポハナクハチヨクハルヲ艸綠春クサキニカハル

詩 首夏之詞 明 郭享貞

巡簷燕子掠晴絲隔水茶烟メグルササギノシラセハルニシラシム

出院遲イシヤウチノシロキ燕メノ片々ト飛ブハ晴天

茶ヲ煮ル烟ハ風ナキユヘチヲヌク立ノボルナリ艸色入簾クサノイロハルニ

人不到午風吹暖夢回時ヒトニズレテハナクハルニ夏草

盛リニハエシゲリ人ノ来ラサル処ホド繁ル午夢サメル折フシ風

和清天ワキヨメ△梅天。必きも四月

天の詩は孟夏清和天テンノシハ孟夏清和天云周之

源氏胡蝶よこして又清タケチノフタフタ

夫木 小大進

雲とれて月とみ渡。夏の花い

卯花朽ウノクハナ頃日の雨とつる卯

きり哥は三月ふも五月はと

とあり連能は四月あり

◎山里の夕の花を存み存系

恒糸をくあり山川のあり 後京極

新暖シンダウ四月の頃日々ふわふ

短夜ミダヨ日と春と短夜と夏

長夜と秋と短夜と冬と

長日チガヒ唐の文宗帝の作り

夏日長と殊小頃日未熱

時衣トキイ若楓衣ニギハヤヒ小千草色

郊花衣キョウハナイ

野麦衣 あまのあしき あまのあしき
おろも あまのあしき あまのあしき

草木

爰ふの四月一ヶ月乃
くさ木とあり心

餘花

△青葉花 殘花○春ふ
おろもて咲のる花く

⑤ 新拾遺

内大臣

別てのはあぐとやゆく春の

日較は花のさたゆるらん

家集 山餘花

雅有

ふりたるま成まよふうげ乃

ま葉いづむまのむれ木

続古今 殘花

俊頼

様ふお跡くぐいひくく

花とてしをまはあき

⑥ 枝ふすくふさ。涼さ本ぐくも。

花葉はまらる。まはれ飛え。風の跡す。

お跡。まははらひらみり。か入る山

桐花

○白桐。黄桐。紫桐。荷
桐。是皆桐の種類く

梧桐

桐ふ似て皮青く。疎皮さ
日月の関と知るべし都

十二葉あり下よりかきて十二葉
の中は小葉もまの其月関也鳳凰
乃栖此桐きり

⑦

寂蓮法師

百あや相の梢ふとむるの

ふとせの井の色もかりし

⑧ 移小も咲てえせる枝相の葉

殿造り並ひてゆし相の花 其角

檀花

○杜仲。思仙。木綿
顯輔

若のむす岩くたももまきさし
是と嵐まきとせどももか

枳花

時珍曰葉の橙のむく木
橘のじ白花とみらる

⑨

枳穀之詞

雍陶

澧水橋西小路斜

ホソイヨコ道
川ツタヒニマ

日高猶未到君家

オタクへ行ツ
カスニハッスギ

村園門巷多相似 ガイシヨノ同シ
ヤウナイハナニ

處處春風枳殼花 キコクノサイ多所
カセアタ、カイ

蜜柑花 大和本草其花をハナ
タチバナと云々

柑子花 花柑子とも云 天木
叶橙の似る人着

依て後、橘き花柑子引慈田

乳柑花 久年母。花 橙
橙に似る 正

柚花 樹葉皆橙に似 金
う花甚香

柑花 花白 雲
雲州柑花 花

佛手柑花 実熟して人の手
に似る故名づく

橘 包橘 盧橘 軒生
草 昔州 庭古州

どよよ花。橘の柑類の惣名也
だいくさうの類とてくらばる

あり世よたらばると称する物の
包橘なり 万葉 三方沙弥

橘の如きむららのやまに
ゆのさそけいといふものを

新古今 通真
行末松花也ぐと夕風り

同 家隆朝臣
今より花咲そひるまむの

いと昔の香ふ白うす孫
家集 風詠 盧橘香 清輔

若う代は枝もるゝとて吹風の
よふまの白ひるを

夫木 閑居橘 光俊
たちまのいけのやれこひるん

のうまのふりてとてんま
同 夜盧橘 如願法師

あうれ花とあふりるさう花の
をどうのふふ白うすらりる

同 里盧橘 隆祐
あひかりむらとみらみらの
志のぶらさう白うすらりる

椴招の皮一年に二三度あつひの
四度剥べし剥ぎれば本つと
長せざる也皮を剥ぐ葉は
所より剥初る葉の付る所

中いられん葉か **柿花** 正字
とふ時あし柿花 柿

○柿ふ七ツの妙あり一多壽ニ多
陰三鳥の巢あり一四虫く

ど五霜葉玩比六実る七落
葉多しはして文字と吞べし右を

柿の七 **榎花** 榎を去てあつひも
絶と云 **榎花** 中い果さ外西齊

○夫木川邊の岩の核は糸とあひ
こら初人の岩をぬらるし 為家

槐花 今月花咲 **卯花** 檜の
実秋入 **卯花** 花

名異 白荊花。錦帯花。空疏。楊櫃
花。志は草。雪見草。初見中

夏雪中。垣見中。卯の花とつひ
つぎるの中畧さる箱根うつ

ぎ 十姉妹。花いろく △岩本う
つぎ △里う川 △三葉うつぎ

○新古今 白河院
卯の花乃びしつとける垣板をば
き居れば月の影とどえんる

卯の花は咲ゆる所い白く人の
波りてゆる垣のともえんる

夫木 後京極撰政
里人のうのまかふふうけみ
内と雪とのむしととと

家集 水辺卯花 西行
五田川うけまをえんるを
おせればさるまう卯の花

家集 卯花似夕顔 匡房
字は見えははるいほほど夕顔の
垣のまろくこけうれむ

夫木 卯花似月 為家
くくの内はけをさるあつひ
あつひのさるさける卯の花

嘉祿百首 河卯花 為家

久しあつるの河乃卯ねむき
月うけぬりたる星のそら

五社百首 暮見卯花 俊成

志ざふのうつろふ家の追風
浪をまきさるる卯の花

夫木 湊卯花 定家

かゝるまのゆふへいさふ吹風
あゝそそむる岩は卯の花

夫木 舟路卯花 家隆

うねふのほやまのゆり人
夜をむさぶふのよせてん

明月 山卯花 教定

神くはよしたひけとさる縁
うのむさけのゆふの山

夫木 社卯花 定家

ふねさるるこのあそやう屋
ゆりてきほくかふるのそら

鳥羽殿哥合 田家卯花 俊成

小山田のいかりふかけて
みづまのまの花は志うそ

夫木 卯花繞家 寂蓮

卯ねむのかさみのまふさびは
いせぬりどいぬりたるそら

金葉 卯花連垣 匡房

つまをらふておまし山雲の
垣根はくまは笑るうねる

千載 遠村卯花 政平

うねるのそとせりたる山雲の
かゝるそらふねる志うそ

後拾 山家卯花 通宗

後絶て来るふるれいざうね
我のそらと笑る卯の花

詞 新 咲ちる白妙雪 若原ま

名目 月田山 山雲のほひ
の月 山雲は雪まげふまうね

開 かつ越のそら くらさ原 分ま

川 ささる布はまふみ 井笑の波
のまうそはのまま海 卯のむら

雨 卯のむら 卯月の時鳥卯の

花のほふかた局 卯のむら
木陰木のるりるまはさる雪 森

表の下りけ田垣あぶが垣の山づりの垣。卯の花垣。ういさ垣

①連あからさきういさのさくら小宗砌
卯の花ははくさき垣や小宗春

卯の花やういさの垣のかき後其角
卯の花ははくさき垣や小宗春

卯の花ははくさき垣や小宗春
卯の花ははくさき垣や小宗春

卯の花ははくさき垣や小宗春
卯の花ははくさき垣や小宗春

卯の花ははくさき垣や小宗春
卯の花ははくさき垣や小宗春

卯の花ははくさき垣や小宗春
卯の花ははくさき垣や小宗春

卯の花ははくさき垣や小宗春
卯の花ははくさき垣や小宗春

卯の花ははくさき垣や小宗春
卯の花ははくさき垣や小宗春

卯の花ははくさき垣や小宗春
卯の花ははくさき垣や小宗春

玉葉 愛牡丹 師兼

草庵 頓阿

卯の花ははくさき垣や小宗春
卯の花ははくさき垣や小宗春

卯の花ははくさき垣や小宗春
卯の花ははくさき垣や小宗春

卯の花ははくさき垣や小宗春
卯の花ははくさき垣や小宗春

卯の花ははくさき垣や小宗春
卯の花ははくさき垣や小宗春

卯の花ははくさき垣や小宗春
卯の花ははくさき垣や小宗春

卯の花ははくさき垣や小宗春
卯の花ははくさき垣や小宗春

卯の花ははくさき垣や小宗春
卯の花ははくさき垣や小宗春

卯の花ははくさき垣や小宗春
卯の花ははくさき垣や小宗春

卯の花ははくさき垣や小宗春
卯の花ははくさき垣や小宗春

卯の花ははくさき垣や小宗春
卯の花ははくさき垣や小宗春

卯の花ははくさき垣や小宗春
卯の花ははくさき垣や小宗春

暮香深若玉堂行 淺復深

群芬盡怯一般態 有此花

幾醉能銷一番紅 醉數杯

詩 牡丹之詞 唐李太白

名花傾國兩相歡 常得君王

帶笑看 牡丹ノ名花ト傾國ノ

御氣ニ入ル故常ニ君王笑

解 秋春風無限恨 沉香亭北倚

闌干 此兩品ニムカヘバドノヤウナ

詩 飲酒看牡丹 劉禹錫

今日花前飲 甘心醉數杯

酒宴ヲナスナリ 但愁花有

語不為老人開 蒼モノ云ハ

イヒ語ルコトアリトモ我等老人ノ

為ニハロハヒラクニジキトナリ

牡丹



錢思公カ説ニ白

花ハ其次キナリト云ヘリ今櫻ヲ

木ノ玉トシ牡丹ヲ草ノ玉トス

沉香亭 唐ノ明皇ノ牡丹

白牡丹 花潔白ニシテ愛

狂 依株ト待リ依リ依リ

詩 白牡丹之詞

長安豪富惜春殘 爭賞

新開紫牡丹 都ニモ春ノ名殘

ノ開クヲワレトチカ 別有玉盤

美露冷無人起 就月中看

丹ヲ白銀ノ盤ニ 見立テ作レリ

白牡丹

種類 三國。五重七重
花びらあつくはやあり

○あし菊。五重大きん○白縮。六
七重大きん○出雲。六七重中きん
○香久山。三重大きん○袖の雪。大
きん二重とこしうあきあり

紅牡丹

種類 漆井。大きん濃
紅りりあざかき多し

○筑前。中きん色濃七八重いろ
蠟紙ふべとやうさうじ○志は
凡大きん薄紅より紙ふくねるお
とけとたるじ○朝日山大きん
五六重丸咲○見越。濃中きん八重
○妙覚寺。大きん四五重○廣沢。大
きん四五重○程々。大きん九重○
待夜。中きん重より○山里。大
紫菊さき○大紅。大きん黒紅よ
ちしきも丸すより一尺まで○乱紅。
中きん五六重紅色より○濱紅。
大きん多し○小泉。色中紅さき

花さきたまてこたえを
きかたりありあり

芍薬

異名 將離。花相。犂
食。餘客。和名。多分

草。かよふ艸。秋根ととりて薬
用ととるあり

非芍薬の四子や葉の赤紫 立圃

芍薬は骨折えゆるゆゆる 移竹

狂咲よりや牡丹と百合のあはれ
松守もあはれ芍薬の花 常樂菴

詩 芍薬五字對句

幸因親切地 孤賞白日落

還遇豐陽時 暄風動搖頻

詩 芍薬之詞 唐 韓愈

浩態狂香昔未逢 紅燈燦々

緑盤龍 昔シヨリカ、ル色香ノ風
流ヲ見ズ花ハ燈ノキラ、

カナル如ク葉ハ青竜ノワタカニルニ

似々 来獨對花情驚恐知

在德宮第幾重 ハナハ仙家ニテ

毛幾重ス

芍藥名花 関守。血三重紅の中ハ黄うこん交リ

○小夜雨。血三重隨分白○金孔雀。血二重やく紅○白砂金。白三四

重○たつき。薄紅二重花中うん白○錦木。血紅三重りり 黄色金半つ

杜若 燕子花ハヤ花ハつとて ○本邦久しく誤り来たり

杜若ハ香草あり此花の正字馬蘭本名ハ荔実なり

○建久百首 定家

拾玉 杜若写水 慈鎮

山家百首 水辺杜若 仲正

惟る位山下あのかさのしとて
ひくさひ深乃色小咲く

○哥の部立ふたつとて春小
とあり連俳より夏より 詞詔

山下あ。橘衣。うそ衣。そらく。
名所。後右。八橋。志賀。昆陽。

廣沢。池。あ。中沢。花うむ

連あどあより清一杜若 宋春

俳 養まけあはれたる杜若 其角

夏の月門控てむかあつと信徳

狂 あてどくふりのあやめつと
似たりや似たりとにめれふり雄長老

一そいこりぞかきし
信海法印

杜若名花 ○鷲尾。うこん中
見え白ら ○羅生

門。うす黒一○橋姫。うりけさ
○濡路。うすまら ○薄雲。白

むらぐりまろり ○ハ少橋濃ひさ
き花首は葉一枚つゝ出る莖一本
小三返つ咲くよめ肥る花四
五つても咲一番花二番花とよみ

知母花 青さ 一八の花 名異

紫羅草 鳶尾 和名は余野
書花紫のて杜若似たり

覆盆子 種類 蛇母 蓬菓
○蕨 樹母 草

王孫花 異名 長孫 芥子花

○名米囊花 ○豊粟花 ○象穀
○御米 能 けーそまひとふ

らるあとの須弥いけり其角
色いこれあかあけりけりた立圃
りや身の中合とるけり坊主宗且
百行とよるまけりけり花訥子

阿片 ○鴉片 ○阿芙蓉 ○阿片
ハけーの花の津液を

ア罌粟青苞とむとぶとさ
午後大なる針とりのて其外
の青皮とて裏面の硬皮と損す

ふこさるれ次の早朝津出ると作
カソそこをけりて瓷器小にて陰
乾めて用ゆ名方一粒金丹は是

を以て製と尤 躍花 續断

久遠の妙茶あり 花葉

の月を生む人笠を 白頂花

名づく花白小に 撥滴下は植る

風露草花 花白梅 梅蕙州 花白

王不留行花 ○金盞銀臺花
藤撫子と似たり

俗名 羊蹄花 ○和 車

大黃

前草花

○異名 牛遺。牛舌。車輪菜。花穂。

文字摺

○綴摺草ともかく本名いまだつらびらみ

靈光草花

○鷹爪。花黄之畧。緑豆に似る実同

山草花

白花。風車花。白花。紫と帯ふ

繡毬花

白花。集味。岩梨。三升。てぬい

石藤

○青つら。つら。花葉とも。紫藤に似る紫白の二種あり

夏枯草

葉まじり。花紫あり

宝鐸花

花鈴。欽のま。倒。垂る。青白色あり

鴨足草

○異名 鏡面草。鹿耳草。花淡紅色

茨花

△薔薇。△牛棘。△山棘。○牛勒。○実と管実と

名づく野生の紅白二種あり人家小栽るの花色数品あり

○晋六帖 秋ひきさうひそつる花のるそあごさるのこのくあつる

千日紅

花の盛り久くして百日日紅は勝る故名づく

青木花

花紫黯色めて美る。葉常盤あり

要花

○扇骨木。正字未詳。らす小白花とひく其

樹最も堅硬して扇骨とす。堪へり故に此名あり

盧陀草

○普婆三礼草。近世南蛮より來る艸

新樹

樹の植物の總名なり。新葉の薄翠ありと云

新古今

○曾根好忠。花らしをの木は同じなり。合て天照の月の影をよれさる

夫木 定家

うけまぐらあしのそくし月見にて
まぐらうのしりぞきそすくさる

玉葉 庭樹結葉 院

そくかて様みくろふさうりぬまの
松のふさもせもまうらうらうら

新續古 山新樹 左大臣

それくふあうせと春まふさう
花こそ友の本未さうらうら

詞さうらうのそくし月見にて
山の葉。若楓。若葉。友本。五月

りぬま。あしのひら葉

若葉 新樹は同一諸木の
葉の若やうさうらうら

非三差ふ目ふ余とと若葉外移竹
湖心彩も三井の若葉うか松雨

わく葉 病葉さうらうの若葉
の内まうらぬ赤く又の

白くあまひの黄いろいぬま
とくみ遊遊といふ夏はてけくわとま

木草茂 草木の繁茂さうら
茂草蔚林さうら

木下闇 木晩の万葉まの木
くれくむ木の茂る

葉櫻 花の本とんれい子
あふのあふらる宗祇

非系様やもまはは葉とさうら文鯉
ゆふさうらまの中の人をさうら 希因

若楓 楓の字九月の所小注す。
八入と称するもの若葉

紅色のて四月青葉小るる其
外冬紅色さるもの今月青葉が

夫木 信実
まうけて糸さる色つく若楓
さもあははとあふあふらん

連 いろも耐ぬ村あ若相宗因

柏若葉 赤柏の若葉乃
色あうらとさうら

常盤木落葉 冬葉の落ぬ木
夏葉と落ぬ

新茶

新製古茶

新茶

刀豆花

色淡紅(能)慈花

葵

二葉草。葵うろ。日吉葵の折さる桂。酉の日加茂へ

遺と加茂ふて葵はとくそめりをゆらつとく日吉草日蔭の

くく葵の日蔭は映て日あで唐土めて菟葵といふゆへ山州加

茂の山中小生と二葉の葵あり面青く裏紫色と帯少うう

上よつとく桂の木枝母つけて簾及器ふはくく北山中村

より歌とるへ葵の種類五月の初をふ新古今 小侍徒

いうちいそのくも山のあふひをうへはれも二葉をうへん

詞が葵を葵。君は葵をききそのか。枝女。白の鹿車。翁さび作の

あつし月神の夜。曙。

非物怪りくひ葵の植述。慶安

狂ぬりくと葵の上小豆をや

白糸のふくまうん 貞徳

詩 葵五字對句

野酌勸芳酒 満園種葵藿

園蔬烹露葵 逸屋樹桑榆

詩 全七字對句

詩變

山中習靜觀朝槿 奈蜀葵

松下清齋折露葵 祇綠多

紫蘭花

紫又白心あり

葉ひろくわてとあり

詩 紫蘭五字對句

押軒竹氣淨 拂蠶蕙風涼

キヨキカガキニクハ

カセトヒニムシロフク

茶挽草 雀麥 徳あり。燕麥

能 かろくまのりもふ 玉卷葛 茶の葉 鬼貫

玉卷芭蕉 宗奩云新葉未開々

蓮浮葉 水面浮き生むる云

卷葉 とつり季に六月と云

能 八月まきの巻葉のゆるき 卷荷之詞 唐韓偓

侵曉衆涼偶獨来不因魚躍

見萍開 曉ノ涼氣ニサソツレ来

卷荷忽被微風觸瀉下清香露

一杯 フヨク風ニ卷キ葉ノ蓮ノフ

トヲチテ

ニホフツ

根都古草 針のやうな細き草

猪殃殃 △葎花ともかく或々

梅葉 能 葉はさうして画まら

麥秋 秋といふ穀成熟の期

麥秋風 麥ふ於てハ則ち秋

能 家集 俊頼

能 化堂 麦づく偽と云き

能 三々の云れかきる麦秋の夕

能 如竹

能

阿人もさびしく人まはしく人を
ぬぐひをひらきささるるまふか教二

青麥

④青むらさき色
△青むらさきの圃 鬼光

麥刈

立春より百二十日して刈
と旬と但小麦十日半遅

麥藁笛

麥の莖より削りて笛
と守小児の戯さう

○西行奥州小下河一人の童子小童
お僧ハ何国へ行玉ふと問ふ西行哥
枕を為とせむる六行のふと然る
う夜ぬの方かふとふ多必辱を得玉
り冬生夏枯る艸を哥とむは僧もを
とあふやといふ西行此艸の事頭丹弁
かて夫より引いて洛へ帰るととこ
この所も西行のゆくり松と毒
あつゝの樹今ふあつゝの草は麦
之是塩竈の明神示現之といふ

詩 麥秋五字對句

川光淨麥隴

綠樹連村暗

日色明桑枝

黄花入麥明

詩 麥秋之詞

明 申時行

光々秀色挺来牟片々黄雲

似水流 麥ノ色トリワケ秀テウ
ルハシホナミノナビクハ雲

波ニ似たり 風作跳波時隱見

雨添新漲乍沉浮 風雨ノ波ヲナ
シテ浮沈見

龍濤生四月 秋 麥秋ノ豊饒
ナルヲイフ

怪狂瀾頻起陸漫教文偉賦

中 秋 起ハカニナシノ

蓮花 小蓮の蕾和名いぬ之

哥多どい詠どるよいつか
とを侍るて賤き身と塵灰をど

以人の思へる心より蓮泥を生じしが
泥と戀よとをてし多かり奥伎抄
和名抄等々泥といふ字と
こいちと訓をさす

筍 たりのこ 笋 異名 竹萌 ○初筍
匡衡

親のこえむり此人のいふと
竹の子れとあるいふべし

能 笋の皆祀師されや東坡の画季吟
竹は子い壽の候より育けふ久住
老傍の留とかい候う那 其角

狂 笋とて新發とて言はれ候
此竹は昔いふまに竹の子候を保友
詩 筍之詞 唐李商隱

嫩 籜香苞 初出林於陵論

價重如金 タケノコノ出カテニハ
價ハナハダ貴シ

皇都陸海應無數 忍翦凌

雲一寸心 都ニモ阜山ニナルベシ
翦ヲシキモノナリ

採筍法 朝早く見て露の上ら
とる月のさぬととるべし露上る
月の大竹とさる 竹根ひろくと
止る法 隣よりさるえ来り候
とさる小海帯と多く埋め
と此方へ生とさるべし

淡竹筍 四月 筍 味ハ淡
盛出 筍 竹亦同

美人艸 ○虞美人艸とて麗麗春
けのふはて花はじ路地葉

唐項王の婦人虞氏自死に其墓上
生じると艸有今もて美人艸とて古
○右の外説多し委しくハ廿六丁出

籜 たりのこ 籜 竹の葉

篠筍 篠ハ小竹ありて俗ニ
筍と呼ぶものなり
類多し筍と皆篠子といふ

哥 拾遺 道昭
今ハ我々もき老の坂こへて
又ハ竹の下の下ら

櫻實

生い青く熟くと赤黒
妙蒸よく魚の毒とけ

非実桜や花をいひはたると温故

実桜や花をいひはたると温故

花をいひはたると温故

種植

大豆 黑豆 大豆 胡蘆 蘿蔔 移栽

石菖蒲 秋牡丹 枇杷 秋海棠 桂 楓 杜若 菊

挿木

沉下花 連翹 雁木 芙蓉 木犀 柏 椿 等

採採

蜂蜜 稀莖 紅花 蚕豆 桃仁 桑の実 杏

生類

此部より四月一ヶ月の 生るるもの

郭公

異子規 杜鵑 杜宇 蜀魂 望帝 不如婦 百舌鳥

玉迎鳥 田歌鳥 早苗鳥 妻戀鳥

田長 志の田長 無常鳥 夕影

鳥 妹背鳥 勸農鳥 くらきり 時鳥

貞應百首 遠郭公 為家

流里のささやみりんやうきす

かのめたさくろえれさうこ

常盤井百首 朝郭公 仲正

やうきあまさくまのえの

はうかふたそるさけらるる

夫木 社頭郭公 大宮大政大臣

このもろとあつねやろとせうれ

ち代林さひてちかくやくかす

夫木 人家時鳥 法印印宗

五月まつきのぶの星のやうやす

卯ねむらりめさうとみと

弘長百首 雲同子規 行家

まらちのうへうここのやうき

そらよりれらうこかろらん

夫木 近岡郭公 俊成

あひれもりのあしの里ふそ

かたしあわははゆきひ外

同 野郭公 定家

交際中のなほ下宿ふはらば
あまてやうつさむいふも

同 里子規 入道二品のこ

るようく作もまのみの里は名を
かまはらうまきふくそとふ

家集 山寺郭公 西行

時をさういそとまりねと
こしきのふいたうりまたり

詞 和音和声。さうらうの唱百料
お声はまをさくまはまのひ孫

ひと声。妻回ふかうよ。志のつ。音
位。啼うす。うう出てる。まのち

声。あうの匂い。山やうき。み
ふと出る。和音。出てる。まのち

まうびなく。里まをさして。里ま
あまらう。海辺破道の松ま

夜の泊ふ。海まのまはれ。明く
に鳴。圓家のうを夜うく。唱で

ふ。まはれを名のうて。唱。曉有

明の月ふ。まをううす。夜く

はまれやまう。朝天のうのう

あうふ。まはれうのうく。唱

夕月はげふ。まをさ。まをさ

まうまて。夕のう。まをさ。夕

ま。人待音。まをさ。たそま

はま名の。夜待ふ。まをさ。夜

待音。まをさ。夜まのまをさ。夜

まをさ。まをさ。人ま。まをさ

雲。まをさ。まをさ。まをさ

るま名の。まをさ。まをさ。まをさ

いつのまをさ。まをさ。まをさ

花枝ま。まをさ。まをさ。まをさ

の花のま。まをさ。まをさ。まをさ

菖蒲。まをさ。まをさ。まをさ

あやゆ。まをさ。まをさ。まをさ

の枕。まをさ。まをさ。まをさ

うちま。まをさ。まをさ。まをさ

ら。枕のま。まをさ。まをさ。まをさ

郭公声

是覺つる心
白川殿 軌忠

何ぞ一夢のふりて
まのつづくふ遠ざかりし

連 一声の足跡山深
非 一夢や只是武の由き候 伊當

狂 中まいぞ辱るまい
やうとくく今の一々 宗輔

夜郭公

月よせし
續千載 高遠

まらまのつど
こを夜ふくも

連 誰がぬの卯は
月の中を

非 煙味香を
夜郭公詞 顧况

野人自愛山中宿
青西 オクヤニラハ
庭前有箇長松樹

夜半子規啼

来上啼

コノタカイニツガニハニアルユ
ヘニ夜ナカコノホトキス
ノコエラキクトナリ

雨中郭公

多く五月雨
りり或は淋き体

家集 雨中時鳥 顯季

狂 ぬの夜やを舟のそ

名所郭公

多く中 詞の所は出
夫木 中務卿

あふぬひうのあはれ

非 津のふれかほ

狂 口紅粉を

○唐土の郭公

と欲寄詩小作

詩 郭公五字對句

杜宇呼名語 渚嶺行客薦

巴江學字流 山木杜鵑愁

同七字對句 詩礎

花外子規燕子月 山岫連

水邊精衛浙江潮 杜鵑啼

望鄉臺下秦人去 顧雲霄

學射山中杜魄哀 子規啼

詩 子規啼 韋應物

高林滴露夏夜清 南山子規

啼一聲 夏露之露ヒヤ、カナル暗

隣家 婦抱子泣我獨

展轉何為情 時ニ感じ物ニ應ジ

霜婦ノ小兒ヲ抱キナガラ泣

郭公 蜀ノ望帝其臣下

不歸 蜀ノ望帝其臣下

泣 故ニ蜀人ホト、キスノ啼

諫鼓鳥 布穀郭公の雌

葭原雀 割葦。芦又ハ葭原

老鶯 亂鶯。四月

雀 吉原

故 老の名あり△乱鶯も同一

鶯附子 よんり音の鶯小子飼
の鶯と附て音習子

鷹塙入 三才圖會曰鷹四月羽
毛と易くとす時章

縵 縵とて鳥屋の内は故ら新毛
生じて七月中旬舊のどくく

鷹三百首 鷹をよつ八日や日の日
おんぞをよおは美羽ふん定家

○鷹三百首抄より外月八日小塙又
入七月十四日又出ととつ 定家

飛蟻 そりといふのく暑湿よ
よりて蟻の羽を生して朽れる

柱より出る

蝙蝠 伏翼。天鼠。仙鼠。飛鼠。夜
△そり △そり 燕△そり 蚊食鳥△そり ○そり 俳△そり 鳥

いも虫ふも二句去々鳥虫の間
まても鼠に似て肉の翹わり大
くこの老鼠の化成くく古き

寺院又い橋の下みどふあり性
椒を好む故に山椒を紙小包

て拋中色は其まぐ地は落る其
所を捕るはりあやまうて手

の指は嘴つけはるらぐくその時
急な山椒をあふふは脱とて

◎新撰六帖 内大臣

日暮れい朝ふあひるきりりの
あふその風も涼りりけき

夫木 和泉武部

人もさくをさふらん持ててい
けいりやうも君をさるひん

非 蚯蚓出 此ころ
土中よ

非 蚯蚓出 此ころ
土中よ

蜘蛛 名 龍齋次書 蟻 蜘蛛

◎夫木 能因

さかしの糸はかたけり白糸は

あれはつる宿の玉をくはれり

詞云。蜘蛛の井を。蜘蛛のふるまひ。蜘蛛の

蜘蛛のあつらひ。さぐさぐさぐさ。蜘蛛の

糸はうら。蜘蛛の糸。さぐさぐさぐさ。

さるる糸。てきぬもゆふひくひく。

あつらひ糸。あつらひ糸。蜘蛛の糸

筋。新糸をいひ糸。まき糸に引

て。風をふくむ。

非。蜘蛛の子は。まき糸をいひ。袋湖雲

珠の葉の葉。まき糸をいひ。袋湖雲

狂。風はよく吹く。して。蜘蛛の網

の。る世界の。けり。大。常。乗。養

詩。蜘蛛之詞。唐。元稹

蜘蛛天下足。巴蜀就中多。

世カイニ多キクモノ中ニモ。蜘蛛

多キハシヨクノクニナリ。縫隙容長

踏虚空。織横羅。スコレ。スキアイカ

紫纏傷竹。栢啮噬。及。畏。蛾

木々。テ。ラ。メ。テ。リ。ス。為。送。佳。人。喜

ム。シ。ラ。ニ。ト。ロ。テ。ト。ル。ツ。カ。レ。ニ。キ

珠櫛魚。奈何。ス。ケ。ツ。カ。ウ。ナ。ル

左。ニ。コ。リ。イ。ハ。ナ。リ。ト。ゾ

蚕眉。蚕。繭。△。蚕。蛾。眉。の。ま。え

後。蛾。△。卵。と。産。是。と。翌。年。の。種。と

非。涼。も。異。さ。い。り。眉。は。入。柳。雪

枝蛙。木。の。枝。に。居。て。鳴。く。故。の

名。つ。く。雨。蛙。も。い。つ。り

非。多。かる。春。の。い。鹿。袋。角

あ。げ。る。鹿。飛。良。鹿。の。あ。ら。う。つ。の

鹿茸。春。落。て。四。月。小。生。る。角。袋

の。さ。く。袋。角。と。斗。も。季。と。持。ち。ま

蟬子。異。名。擁。劍。△。虎。蟬。△。蟬。子

△。椀。棹。子。△。蟹。の。属。さ。り

初鯉。鯉。一。名。の。松。魚。肥。満。魚。

堅。魚。至。て。早。さ。い。春。う。ら。い

つ。く。東。都。ま。て。甚。賞。玩。と。價。心。貴

非。安。ら。う。一。月。の。な。し。初。松。魚。風。光

鯉釣。餌。と。用。ひ。ず。て。牛。の。角

或。ハ。鯨。牙。を。釣。ま。り

生節 鯉魚と四ツふたつとく蒸し燻乾して脯となすよ

其いままこ堅硬きくさつものよ世俗よんてあまがりとつくり

必用 此部は四月要用の事又ハ天氣養生の法等也

日刻 己の日己の刻事とるは日中の時ふ用やぐざ月建く

出行作事 西の方小向してはかへやむとつる今月天道西行故

破 夜九ツ 夜八ツ 夜七ツ 未の方 申の方 酉の方

軍 朝六ツ 朝五ツ 辰の方 戌の方 亥の方 子の方

向 昼九ツ 昼八ツ 昼七ツ 丑の方 寅の方 卯の方

方 暮六ツ 夜五ツ 夜四ツ 辰の方 巳の方 午の方

樂事 清和の天と云霞も霧もほけて空の氣色翠まらほい○更衣かつふふ地より○木々の葉若やうまうの若

山吹も咲のさうさう○牡丹芍薬盛り富貴之○郭公の初声○葵祭

天氣 曇りても北風強く晴も西南の風ハ雨も梅雨の前

西風続吹とまらふ云昼夜く此風よて北国廻船来之○今月粟有

采麦後○庚辰辛巳ハ雨降ハ蝗後○丙寅丁卯ハ雨降ハ米價貴

○甲子庚申の日雷されハ禾小虫く今月雨多クハ麦よあし夜ハ雨

多クハ養生 立夏の後甲子麦と損す 五日北斗辰己ハ

建と此日乾く来ハ疾風暴雨ハ當是ハ人と傷と急ハ虚邪賊風

とさハ聖人これと矢石の如く避くさつとろ委ハハ内経に見る

四月用意之品 龍よま

海蘿子干 今月より

七月七日まで干はくしりり
季の夏とともふなり

徹不出法 天氣よれた時
日はうらして

とりねさる人箱よい紙は
てとれたも紙張はおきて梅
雨のちこれとひりけいあび
ゆる率さういなり妙き
衣服さくもかくれおき
とれがわび生ともことほ

草木と伐法 この月諸
木とさしげ

蛙といひくまー〇菖蒲
の葉あききとて撰てよの

ころきりさふなり五月よ
りて能葉しりふなり

糊小虫はくする法 櫛乃
葉と

おわいぬあてゆひ日数
と経ても虫少し生じも

四月飲食并料理献立

料理
汁 すすき 塩鳥
もろこし ぶらわ

汁 さぎたの
ごりう 子 鱈
あぢり

鱈 あぢり
あさうごのこ
しそ

差 せいご
あそ

味 まる
あせい
煮物 さぎたのこ
あせい 塩鳥

吸物 まらご
こすご

和會 せいご
あせい

物 せいご
あせい

物 せいご
あせい

精汁

丸い豆 竹の子

進汁

丸い豆 竹の子

膳

あしが大根 法そ 油あげ

差味

あしが大根 法そ 油あげ

煮物

あしが大根 法そ 油あげ

和會物

あしが大根 法そ 油あげ

時魚

鯉 生節 あら 魚

鹽鳥賊

鹽鳥賊 鹽鳥賊

青物

苣の臺 青うんし

貯竹筍法

盛り過ぎ 貯んと思ひ随分よれ大筍

酒味替

酒味替 酒味替

海松

海松 海松

白うり

白うり 白うり

あし

あし あし

さや豆

さや豆 さや豆

まき

まき まき

酒味替

酒味替 酒味替

安

安 安

十五枚

十五枚 十五枚

かえ

かえ かえ

貯ん

貯ん 貯ん

貯ん

貯ん 貯ん

ほうごぬま井の中へけりさげ
 水際を放し皮目を水氣
 の入らぬやうめて置べし五月
 上旬地笥の終りなれを六月
 中はくすま 皮を去り
 少し撥き 同法 さいき処を
 切捨ニッは割て篩の間へ塩
 を一わい入し桶をあらへ上へ
 いく重もかき蓋をして
 ありとあちをくべし 又法
 皮を去り熱湯をゆびさか
 めて締めをくべしとて用る時
 白水をあらうして用
 色白くしてよし

茄子なすびの貯法たくらみ 李なしびと桶
 へ入蓋して

河の瀬早ら処へ埋め石とお
 ころしなみそくを懸しつらまそ
 も生うそよく持つ



